OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける＜記憶＞の運動 : 判明な知覚へ向けて
Author(s)	加藤, 憲治
Citation	カルテシアーナ. 1989, 9, p. 7-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66927
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンにおける〈記憶〉の運動

——判明な知覚へ向けて——

加藤憲治

はじめに

『意識の直接与件についての試論』におけるベルクソンの発見は，空間と区別される純粋持続にあった。この持続は，外的世界から離れ，抽象の厳しい努力によって意識自身に戻ることによって見出された。持続を見出す試みは，『省察』においてCogito, ergo sumを見出したデカルトの試み同様に[1]，外的世界と内的自我を徹底して区別した。したがって，外的世界と内的自我の関係を説明することが緊急の課題となる。それゆえ，『物質と記憶』は副題が示すように，ベルクソンの心身問題に対する試みであった。

ベルクソンは心身問題を以下のように考える。常識の立場に立つならば，物質と精神という二つの実在が置かれる。なぜなら，観念論のように物質を精神に還元することも，実在論のように精神を物質に還元することも，常識にとって不可能のように思われるからである。また，平行論と違って常識は，物質と精神との間には何らかの関係があると考えるからである。常識の立場と同様ベルクソンは，精神の実在と物質の実在とを肯定する二元論をとる。しかし，ここで二つの実在がある，と単に主張しても不毛であろう。肝腎なことは，二つの実在がどのように関わりあっているかである。したがって，ベルクソンは『物質と記憶』において，物質と精神の接触点にau point de contact entre l'esprit et la matière身を置こうとする[2]。それではベルクソンは，この接触点において心身問題をどのように立てるのだろうか。大切なのは，問題を措定することよりも発見するこ

とであるならば（PM, 51），ベルクソンの発見はどの点にあるのだろうか。

ベルクソンは物質と精神とを，異なる実在として対立させるが，両者の間に何らかのつながりが認められなければならないだろう。私たちは，この両者の接点を純粋知覚に見出す。ただし，純粋知覚は物質と精神との権利上の一致であるがゆえに，ここに事実上の一致をみることはできない。物質と精神の事実上の結合は，具体的知覚，判明な知覚において認められる。この知覚は，純粋知覚と純粋記憶とを総合することに成り立っており，その際，〈記憶〉[(3)]の働きが重要な役割を果たしている。

そこで本稿では，〈記憶〉の働きを明らかにするために，まず〈記憶〉なき精神としての純粋知覚の概念を明らかにしたい。そして独立した〈記憶〉の存在を問い，この〈記憶〉がいかにして純粋知覚を受け取るのか，すなわち，いかにして判明な知覚が成り立つのかを，〈記憶〉の構造を通して検討してみたい。

第一節　イ　マ　ー　ジ　ュ

ベルクソンによれば，心身問題における二元論の理論的困難は物質に対する考え方から生じる。例えば実在論のように物質を事物そのものとすれば，物質はそれ自体独立した存在であり，それぞれが科学的法則に従う世界を構成することになるだろう。しかし，科学的世界とは別に，知覚の仕方に応じて変化する意識的世界があることは否定できない。ここに実在論的物質観の障害がある。観念論的物質観は，逆にこの意識的世界を物質の出発点にする。すなわち，物質を知覚の仕方に応じて変化する表象としてとらえる。しかし，今度は科学的世界の秩序が理解できなくなる。実在論的物質観も，観念論的物質観も，科学的世界と意識的世界とを両者同時に説明できない。両者同時に説明するためにベルクソンは，イマージュという独特な物質観を提示する。

「私たちにとって物質は『イマージュ』の総体 un ensemble d'《images》である。そして『イマージュ』によって私たちは，観念論者が表象と呼ぶもの以上の，そして実在論者が事物と呼ぶもの以下の，或る存在を

理解する。この存在は，『事物』と『表象』との中間に位置する存在である」(MM, 1)。つまり，ベルクソンの考えでは，物質を事物としてとらえることも，表象としてとらえることも，行き過ぎなのである。

ベルクソンが考えるイマージュとしての物質は，私たちが知覚するように生彩に富んだ存在である。つまり，ベルクソンはバークリーと同様，物質に第一性質のみならず第二性質をも帰する。こうした感覚的諸性質を伴った物質は，私たちにとって，物自体という得体の知れない存在ではなくなる。したがって，私たちは物質を何らかの形でとらえることが可能となる。ただし，第一性質・第二性質をもった物質が主観に基づくとしたバークリーと異なり，イマージュはそれ自体で存在する，とベルクソンは考える。「イマージュは知覚されなくても存在しうる」(MM, 32) と言われるように，イマージュは私たちの知覚をはみ出る独立した存在である。このことによってベルクソンは，存在しているけれども知覚されない物的対象が，意識に与る余地を残そうとする (MM, 164)。

しかし，イマージュの総体としてみられた物質は，従来の物質観をあいまいにしたものにすぎない，との批判もなされ得る[4]。実際，イマージュは，実在論の事物と観念論の表象との中間に位置づけられるため，いろいろな意味を含んでいる。すなわち，イマージュに，事物・表象・形像記憶 souvenir-image・記憶形像 image-souvenir・記憶という多様な意味を帰することができるだろう[5]。したがって，相対立する意味を内包するイマージュという用語は無意味ということになる。しかし，こうした批判は結局，従来の物質観に基づいているためである。そもそもベルクソンがイマージュという用語を用いるのは，物質＝延長という物質の見方を斥けるためなのである。なぜなら，物質＝延長，精神＝非延長という二元論の区別にある限り，最初から両者のつながりを断ってしまうことになるからである (MM, 247)。もちろんベルクソン自身延長という考え方を採るけれども，その延長は不可分の，具体的延長 étendue concrète である。この延長は無限分割可能な延長ではない。無限分割できる延長は等質的空間に属するものであり，この空間は物質に対する行動の図式にすぎない (MM,

232)。したがって，ベルクソンは物質と空間を区別する。

ベルクソンは，空間と区別される物質を以下のように考える。「物質は，空間にひろがる限りにおいて，絶えず再開する現在である，と定義されなければならない」(MM, 154)。ここで，空間にひろがる限りにおいて，と条件づけていることに注意しておく必要がある。つまり，この条件を捨象して物質そのものをみれば，絶えず再開する現在とはいえず，持続する可能性も残るからである。そのため，「物的世界自身は，イマージュ全体として定義されるならば，一種の意識である」(MM, 264) ということになる。こうした物質観は『創造的進化』でさらに進展して，「宇宙は持続する」(EC, 11) と言われる。しかし，本来の持続と区別するために，物質界が持続することはあくまで仮説として受けとめられなければならない[6]。したがって，ベルクソンの考えでは，物質は絶えず再開する現在である。つまり，物質は空間によってではなく，時間によって定義されなければならないのである。それゆえ，「イマージュは現在の状態であり，イマージュが出てきた記憶によってしか過去の性質を帯びることはない」(MM, 156) というベルクソンの主張も首肯できる。すなわち，イマージュは，たとえその出所が記憶にあるとしても，イマージュである限りは現在の状態である。記憶の現実化された状態であるイマージュが過去を示すとすれば，それは潜在的な記憶を過去の奥底から思い出すという作用に身を置いたからにほかならない (MM, 154f)。しかし，そのイマージュが現在であることに変わりはない[7]。このように時間的観点からイマージュが現在の状態を示すものとすれば，空間的観点からみたイマージュのあいまいさも消失するように思われる。それゆえ，イマージュという用語は，従来の二元論にとって障害となっていた延長と非延長という空間的区別ではなく，現在と過去という時間的区別を準備するものと考えられる。

イマージュという概念によって，物質はそれ自体の存在を保持しながらも，私たちにとって無縁の存在ではない存在，すなわち，感覚的諸性質を通して知られうる存在とされた。しかし，ここで感覚的諸性質を通して知られる物質が，バークリーのように主観的でも，カントのように相対的で

もない，とベルクソンは主張できるのだろうか。

第二節　純　粋　知　覚

私たちがイマージュの総体としての物質をとらえるとき，知覚に対する考え方が問題となる。ベルクソンの知覚に対する考え方は，物質の場合と同様，実在論や観念論と異なる。ベルクソンの考えでは，観念論は意識的世界における知覚を純粋認識とするから，物質の秩序が理解できなくなる。逆に実在論は，空間を知覚の条件とし，その空間に純粋認識をみるために，知覚が説明できなくなる。両者とも，知覚，あるいは，その条件を純粋認識とみなすことが誤りなのである。ベルクソンは，知覚が純粋認識にではなく，行動に向けられている（MM, 27）と考える。彼は知覚を，物質そのものと精神そのものとが関わる行動の水準においてとらえようとする。こうしたとらえ方をするのは，行動がまさに心身結合の存在理由であるからにほかならない（MM, 248）。しかし，どんなに知覚が短いものでも，持続を占めるならば，その知覚には〈記憶〉が介しており，したがって，主観的な知覚になる。そこでベルクソンは，主観的側面――感情と〈記憶〉――を排除した知覚を考える。それが純粋知覚である。純粋知覚は「事実上というよりは権利上存在する知覚である。私のいる場所にあって私と同じように生きる存在であるが，あらゆる面において〈記憶〉を排除することによって，物質から直接的かつ瞬間的視像 vision を得ることのできる存在がもつ知覚」（MM, 31）である。純粋知覚が物質から直接的かつ瞬間的視像を得るのは，第一に身体を空間における数学的点として，第二に意識的知覚を時間における数学的瞬間として，扱うことを条件とする（MM, 262）。この二つの条件は事実上は認められない。特に第二の条件については，実在する運動の不可分性が瞬間の不可能性を意味する以上（MM, 212），ベルクソンにとって容認できないものといえる。しかし，純粋知覚が権利上のものだからといって，単なる虚構というわけではない。なぜなら，単なる虚構とした場合，「すべての具体的知覚は，どんなに短いものを考えても，継起する無限の『純粋知覚』を〈記憶〉によってすで

に総合したものである」(MM, 203) 以上，〈記憶〉は総合すべきものをもたない内容なきものになるからである。むしろ，事実上の知覚において，意識の状態と私たちから独立した実在とを同時にとらえるという過程(MM, 228f)，すなわち，純粋知覚を認めるべきであろう[8]。したがって，「純粋知覚は理想や極限にすぎない」(MM, 274) としても，純粋知覚はベルクソンにとって精神の単なる構築物ではない (M, 485)。純粋知覚は，「結局，実在そのものに一致する直接的直観」(MM, 68f) にほかならない。ベルクソンによれば，この直観は，精神による精神の内的認識ではないが，物質における本質的なものの，精神による認識である (PM,216註)。

純粋知覚という概念は，前節でみたイマージュという物質の考え方に基づく。つまり，イマージュは独立した存在であるが，感覚的諸性質を通して知られる存在であった。そこで，純粋知覚が，すなわち，事物の中に一気に d'emblée 身を置く働き (MM, 70) が認められるとき，従来の心身関係にみられる困難を回避することができるだろう。第一に，身体と精神との関係が相互の複写だとするならば，その複写の複写というように，無限背進に陥ることになる。この点で，主観と対象との部分的一致である純粋知覚は，この問題を免れる。第二に，主観を出発点として外的対象を説明する場合，非延長としての主観が，外的対象の延長をいかにして得るのか，さらに，視覚と触覚などの諸感覚の対象に対する一致をどのように説明するのか，という問題が生じる。しかし，純粋知覚が認められれば，主観は対象において知覚するのだから，こうした問題は回避できるだろう。この二点で純粋知覚は従来の困難を解消する。しかし，純粋知覚について別の問題が生じる。つまり，純粋知覚において対象の中に身を置くことができたとしても，この知覚がどのようにしてわれわれの知覚となるのか，という問題である。

ベルクソンによると，「まずイマージュの総体がある。このイマージュの総体の中に『行動の中心』がある。この行動の中心に対して関係するイマージュが反射しているようにみえる。こうして知覚が生じ，行動が準備される」(MM, 46)。この『行動の中心』は身体を意味し，ここで生じる

知覚は物質の知覚にほかならない。そして，物質の知覚は，意識を導入することなく，イマージュの総体と身体だけで説明される。すなわち，物質の知覚は，身体の可能的行動に関係し（MM, 17），イマージュ全体の中から抜き取られたものである。したがって，この知覚においては身体が主要な役割を果たしている。身体は単なるイマージュではなく，諸イマージュの中に可能的行動を素描する。それゆえ，「全体的にみて知覚は，動こうとする身体の傾向に真の存在理由がある」（MM, 44）と言われる。ただし，イマージュ全体から物質の知覚を抜き取るという選択が身体の行動に応じてなされるとしても，その選択の仕方は恣意的なものではない。ベルクソンの考えでは，「イマージュ全般の中の知覚の選択は，すでに精神を告げる識別 discernement の結果である」（MM, 264）。ところで，次節で述べる身体の〈記憶〉は独立した〈記憶〉と区別され，習慣とも言われる（MM, 89）。この知覚の選択に身体の〈記憶〉が関わっていると考えられるだろう。しかし，ベルクソンは，身体は行動の道具・選択の道具であり，表象を生みだすことはできない，と強調する。このようにベルクソンが強調するのは，知覚が脳の中ではなく，対象それ自体において成り立つことを主張するからである。また，身体が選択そのものを行ない，そこに知覚が成立するならば，精神は知覚にとって無用のものとなるからであろう。したがって，身体は選択の道具にすぎない。

それでは，選択されたものが主観的でも，相対的でもない，とベルクソンに従って主張できるのか。「純粋知覚と物質との関係は部分と全体との関係であるから，物質の意識的知覚と物質そのものとの間には本性の差異ではなく，程度の差異しかない」（MM, 74f）とベルクソンは言い，また，次のようにも述べる。「物質の知覚は，少なくとも理論上感情と〈記憶〉を捨象すれば，相対的でも主観的でもない。それは多数の欲求によってただ分割されているだけである」（MM, 49，傍点は筆者による）。しかるにベルクソンの考えでは，「感覚の客観性，すなわち，感覚が与える以上のものは，……いわば繭の中のように感覚が行なう無数の運動にまさしくある。感覚は表面上では不動に拡がっているが，ひそかに生き，振動してい

る」(MM, 229)。この点で，諸性質の中に内的振動がひそかに存し，赤色の感覚は二万五千年以上の期間を凝縮しているとも考えられる。つまり，ベルクソンの考える感覚の客観性は，内的振動に還元されなければならない。したがって，感覚対象の客観性を得るためには，上述の欲求を解体しなければならない（MM, 205)。それゆえ，純粋知覚を構成するのが生じつつある行動であり（MM, 71)，行動が欲求に基づく以上，純粋知覚は客観性をもつわけではない。しかし，純粋知覚は主観的なものでもない。物体のあらゆる影響を知覚することは物質の状態になることを意味するから（MM, 48)，全体的に知覚することはできないし，その必要もない。そもそも純粋知覚は物質との部分的一致であり，その点で純粋知覚が物質の本質をとらえていると考えることもできるだろう。なぜなら，知覚における主観的側面は，ベルクソンにおいては〈記憶〉に由来するものであり，純粋知覚はその〈記憶〉を排除したものだからである。ベルクソンの考えでは，純粋知覚は私においてよりも事物においてあるのだから主観的ではない。また，現象と実在との間には仮象と実在との関係ではなく，部分と全体との関係があるのだから相対的ではない（MM, 259)。このように純粋知覚は主観的でも相対的でもなく，物質の限定された認識である（M, 774)。ベルクソンの比喩を用いるならば，純粋知覚は経験の源と人間の経験との曲り角にあるといえるだろう（MM, 205)。純粋知覚を物質の限定された認識と考えるとき，「私たちの知覚をありのままの状態で，直接的形態でとらえるならば，事物の客観性は知覚に内在する」(M, 773）というベルクソンの言葉も理解できるだろう。

以上のことから，物質と主体との部分的一致である純粋知覚は，部分的という限りで客観的とはいえず，ここに主観とのつながりがみられるが，一致という限りで客観性をもちうるものといえる。この点に主体と客体との接点としての純粋知覚の特質をみることができる。ただし，この知覚は権利上のものであり，諸記憶の前では単なる記号にすぎない（MM, 30, 68)。問題は，この記号がいかにしてその意味をもつに到るか，また，権利上の主客一致である純粋知覚がいかにして事実上の具体的知覚に認めら

れるか，という点にある。

第三節　〈記　憶〉の　存　在

私たちは前節で，部分的主客一致を示す純粋知覚の理論をみた。ベルクソンにおいてこの知覚と本性を異にするのが〈記憶〉の存在である。しかし，純粋知覚と〈記憶〉は本性の差異があり，〈記憶〉は独立した存在である，といえるのだろうか。通常は，知覚が成立したあとで記憶が形成される，と主張される。私たちはこうした主張を，純粋知覚を考えることによって斥けることができるだろう。純粋知覚は，たとえ権利上のものとしても，主客一致を示すのだから，純粋知覚において同時に記憶も形成されている，と考えるべきである。[9] そこで，知覚と記憶が本性上異なるとすれば，その存在の仕方が異なるというべきであろう。つまり，知覚は現実的にあるのに対して，記憶は潜在的にある。しかし，このように知覚と同時に形成された記憶が，独立した存在を示しうるのだろうか。

〈記憶〉の独立性を示すためにベルクソンは，〈記憶〉を二つに区別する。一つは独立した〈記憶〉であり，もう一つは身体の〈記憶〉である。独立した〈記憶〉は，「記憶形像の形で，日常生活の出来事が展開するにしたがってそれらをすべて記録する。この〈記憶〉はささいな事柄も見逃さず，あらゆる事実，所作にその場所と日付を残しておく」(MM, 86)。つまり，この〈記憶〉はありのままに私たちの過去を保持し，「決定的過去 passé définitif を動く」(MM, 168) のである。これに対して身体の〈記憶〉は「〈記憶〉そのものというよりは，〈記憶〉によって照らされた習慣である」(MM, 89)。身体の〈記憶〉は「絶えず行動に向かい，現在の中に位置し，未来しかみない」(MM, 86)。この二つの〈記憶〉の根本的違いは，本質的に反復されえないものと反復によって成り立つものという点にある。独立した〈記憶〉は，すべての記憶形像にその日付と場所を保存しておくのだから反復されえない。独立した〈記憶〉にみられる「自発的記憶はただちに完全なものとなる」(MM, 88)。それに対して，身体の〈記憶〉は同じ努力の反復によってはじめて獲得されうる。この場合，

独立した〈記憶〉が反復によって身体の〈記憶〉に変わるのではない。身体の〈記憶〉は独立した〈記憶〉を反復によって利用しているだけなのである。身体の〈記憶〉は独立した〈記憶〉をまってはじめて成り立つという点で，独立した〈記憶〉こそ真の〈記憶〉といえる。そして，この二つの〈記憶〉は現在と過去とに区別される。したがって，精神と身体との関係は，独立した〈記憶〉と身体の〈記憶〉との間にみることができるだろう。しかしながら，私たちはこの両者の関係を見る前に，〈記憶〉の独立性がどの点にあるのかをみておきたい。

まず，独立した〈記憶〉の存在を示すために，記憶が脳の中に蓄積されているという説を，ベルクソンは次のように覆す。この説によれば，文章の再認は脳に保存された個々の単語の記憶によって説明されることになる。しかるに再認・解釈が行なわれるのは，文章全体を通してである。それゆえ，再認の説明という点でこの説は困難に陥る。そして，ベルクソンは失語症や言語聾を分析し，脳の損傷に伴う記憶の消失は，表面的なものであるか，あるいは，記憶を現実化する機能が損なわれているか，のどちらかであると考える。したがって，「私たちは，脳髄の特定細胞の破壊によって廃止される記憶を見出すことはない」(MM, 134) と言う[10]。このようにしてベルクソンは，記憶が脳に保存されるという説を斥ける。しかし，これは仮説に対する反論にすぎない。独立した〈記憶〉の存在が認められるためには，この反論では不十分である[11]。それゆえ，独立した〈記憶〉の存在を積極的に提示しなければならない。〈記憶〉の存在の提示として，次にベルクソンの無意識と存在の分析をみたい。

ベルクソンの考えでは，意識は心理的領域において存在と同義語ではなく，単に現実的行動の，あるいは直接的有効性の同義語にすぎない (MM, 156f)。それゆえ，無意識の状態が存在しない，とみなす必要はない。ここから，知覚されない物質，すなわち，無意識状態にある物質の存在と同様に，無意識状態にある記憶も存在する，とベルクソンは主張する。そして，この二つの無意識状態のうち，物質の方は存在するように思われ，記憶の方は存在しないように思われるのは，行動の必要性のためである，とベル

クソンは説明する。しかしながら，この場合問題となるのは，存在という点で記憶が物質と同様に存在しているのか，ということである。

そこでベルクソンは存在の条件を二つ挙げる。すなわち，(一)意識に現前すること，(二)こうして現前するものとそれに前後するものとの論理的，あるいは因果的連関，この二つである（MM, 163)。そして，存在は，いつも同時に，しかし異なった程度で二つの条件を満たしていると言う。記憶の存在についてみるならば，過去の心的生活全体は，因果的連関によって現在の状態を条件づけており，こうした過去の状態は，はっきりしたものではないとしても現前している。したがって，過去の記憶は存在の二つの条件を満たしているので，無意識であるとしても存在する，とベルクソンは主張する。しかし，彼の主張する無意識としての記憶の存在は，以下のように批判されうる。まず，二つの条件の意味があいまいであるし，二つの条件の結びつき方もはっきりしない[12]。また，この二つの条件を認めるならば，逆に存在しないものがあるのか，と問われることになるだろう。したがって，この二つの条件で記憶の存在を示すことはできないように思われる。

それゆえ，〈記憶〉の存在は，存在の定義によって提示されるのではなく，逆に〈記憶〉の在り方が存在を定義する際の前提になっている，と私たちは考えることもできる。この点を明らかにするために，無意識と存在の分析に続くベルクソンの記述をたどってみよう。そこでは，記憶の存在を認めることができず記憶がどこに保存されているかを求める習慣の原因を説明している。彼によると，その原因は，空間内の物体についてのみ正しい含むことと含まれることとの関係を，時間における記憶の系列に帰することにある。そして，「過去がそれ自体で en soi 残存するということは，どのような形であれ免れえない」（MM, 166）と言う[13]。このように過去の，すなわち，記憶の存在を語ることは，無意識や存在の分析によっても記憶の存在を示しえなかった，ということを意味するだろう。それゆえ，〈記憶〉の存在は存在の定義によって説明されるのではなく，逆に存在の定義こそ〈記憶〉の在り方によって説明されると言うべきであろう。この

ように考えれば，〈記憶〉の在り方は，過去がそれ自体で残存するという在り方であり，この在り方が存在の定義の前提となっているといえる。これと同様な考え方は，『創造的進化』における持続に見出すことができる。例えば，「意識的存在者にとって，存在することは変化することであり，変化することは成熟することであり，成熟することは自ら自己を創造することである」(EC, 7)。そして，「持続は私たちの存在の基底である」(EC,39) という考え方である。つまり，意識的存在者にとって持続することが存在を定義するのである。それでは，この持続と同様に，〈記憶〉の在り方が存在を定義するといえるだろうか。

存在を定義する〈記憶〉の在り方をみるためには，この節のはじめに示した二つの〈記憶〉の区別にこだわりすぎてはいけないだろう。二つの〈記憶〉の区別にこだわりすぎると，本来の〈記憶〉の特質を見失うことになるからである。そもそもベルクソンにおいて〈記憶〉は，過去から現在への進行にあるのであり (MM, 269)，過去の全体を伴って前方へ推進を行なうものである (MM, 187)。また，『創造的進化』における持続は，未来を侵蝕し，前進しながらふくらむ過去の連続的進行である (EC, 4)。この点で，〈記憶〉も持続も，過去から現在への進行，要するに，不可逆な時間の流れとしてとらえられる。時間の流れという点に，意識的存在者の存在がまさにある，といえる。したがって，意識的存在者にとって持続することが存在を定義するのと同様，〈記憶〉の在り方が，すなわち，過去全体を伴う前方への推進が，存在を定義すると考えられる。とすれば，今度は反対に，意識的存在者の存在を成り立たしめている〈記憶〉の構造を検討しなければならない。

第四節　現在と過去の区別

前節で精神としての〈記憶〉の存在を検討することによって，〈記憶〉の存在はその在り方によって提示されなければならないことをみた。しかし，〈記憶〉の存在がその在り方によって提示されるということは，一体何を意味するのだろうか。これまでの考察を振り返れば，ベルクソンにお

いて物質は，絶えず再開する現在とされた。また，精神としての〈記憶〉は，過去・現在・未来という時間の流れとしてみられるが，過去を保持する限りで過去ということができる。ここに物質と〈記憶〉は根本的に区別される。しかし，物質と〈記憶〉は純粋知覚において部分的な一致をみることができた。ただし，純粋知覚は権利上のものであるから，純粋知覚に事実上の心身結合をみることはできない。事実上の心身結合の問題は，純粋知覚からいかにして具体的知覚・判明な知覚が成立するか，という問題である。換言すれば，〈記憶〉が，自分にとって他なるもの（純粋知覚の対象）をいかにして自分のものとして受け入れるか，という問題でもある。結局，この問題は，〈記憶〉における事実上の現在のうちに純粋知覚の瞬間的現在をいかにして認めるかという問題であり，〈記憶〉における事実上の現在と過去の関係の問題となるだろう。ところで，〈記憶〉の存在のために〈記憶〉の在り方を明らかにするという問題は，〈記憶〉における事実上の現在と過去の関係の問題である。したがって，〈記憶〉における事実上の現在と過去の関係を，つまり，〈記憶〉の構造を示すことは，心身結合の問題と精神としての〈記憶〉の存在の問題とを同時に明らかにすることになる。精神の存在が示されることと同時に心身結合が示されるということがどのような意味をもつのかは，それ自身一つの問題であるだろう。しかし，ここではさしあたり，心身問題として〈記憶〉における事実上の現在と過去の関係を考察してみたい。この観点からすると，ベルクソンは，物質と精神とを，絶えず再開する現在と時間の流れとしての〈記憶〉に区別し，心身結合の問題を〈記憶〉における事実上の現在と過去の関係の問題としてとらえていることになるだろう。こうした時間による問題の立て方にこそ，従来の二元論にみられなかったベルクソンの新しい発見があるといえる。すなわち，ベルクソンの考えでは，「主体と客体に関する問題，その区別と結合に関する問題は，空間によってよりも，むしろ時間によって立てられなければならない」(MM, 74)。

したがって，〈記憶〉の構造こそが問われなければならない。しかし，〈記憶〉の構造といっても，ベルクソンの〈記憶〉に構造というものがみ

られるのだろうか。時間化 temporalisation を主張する哲学者たちのように[14]，ベルクソンを次のように批判することができないだろうか。すなわち，「ベルクソンは持続の結合に執着して，過去・現在・未来の区別と再結合を認めなかった」と。しかし，こうした批判は的はずれのように思われる。少なくともベルクソンは『物質と記憶』において過去と現在を区別し，両者の結びつきを説明しようとしているからである[15]。この説明されるべき事実上の現在と過去との間には，知覚と記憶との間と同様，本性の差異があるといえる（MM, 152)。それでは，事実上の現在と過去はどのように区別されるのだろうか。

ベルクソンによると「現実の，具体的な，生きられる現在は必ず持続を占める」(MM, 152)。この現在は数学的瞬間ではなく，直接的過去の知覚と直接的未来の決定を伴うものである。そして，「私の現在は私の関心をひくものであり，私にとって生きるものである。それに対して，私の過去は本質的に無力である」(MM, 152)。要するに，事実上の過去は本質的にもはや働かないものなのに対し，事実上の現在は活動的なものであり，この点で両者は区別される。過去と同様に記憶も無力であるといわれるが，この無力さは根本的無力さを示すようには思われない。繰り返されない過去や記憶は潜在的で，現実化されるならばそれは新たな知覚とみなされる。しかし，記憶は，次節でみるように，〈記憶〉の運動によって現実化される意向 intention（MM, 143註, 145）であり，記憶の全体は絶えず無意識の底から押し寄せるものなのである（ES, 145)。この意味で過去や記憶が現在や知覚を成り立たしめており，この限りで根本的無力ではない。また過去や記憶が無力なのは無用である限りにおいてである（MM, 154)。したがって，過去は根本的無力とはいえない。この点で，現在と過去を活動的か否かで区別するのは，はっきりしない区別といえる。

この現在と過去との区別について，ベルクソンは『変化の知覚』において次のように述べる。「私たちの現在と過去との間になしている区別は恣意的なものではないとしても，私たちの生への注意 attention à la vie が包みうる領域の広さに関係している。『現在』はこの努力とちょうど同

じだけの場所を占める。要するに，私たちが現在に現実の関心をもたなくなったとき，私たちの現在は過去になる」(PM, 169)。このことから，現在と過去を区別するのは，生への注意であることがわかる。ベルクソンによると生への注意には，種の注意と個人的注意があり（ES, 77, 146)，前者は自然によって課された恒常的な注意である。そして，個人的注意は種の注意に基づく。この意味での生への注意は，実践的生への注意といえよう。したがって，現在と過去の区別は実践的生への注意によるものになる。しかし，この基準もあいまいであるように思われる。なぜなら，生への注意によって現在が一瞬のものであったり，長い期間のものであったりすることが考えられるからである。ところで，私の現在は私の身体についての意識であり（MM, 153)，身体の〈記憶〉が現在に位置するならば，また，独立した〈記憶〉が決定的過去を動くとするならば，現在と過去との区別は，既にみたように身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉との間にあるだろう。もちろん，私の身体についての意識は生への注意によって変化するが，身体という実践的生への基盤を介入させることによって，現在と過去はよりはっきり区別されるはずである。また，生への注意によって身体についての意識に変化があるとするならば，それは恣意的というよりも，むしろ現在と過去との関係（区別と結合）を如実に示すものといえるだろう。

このように身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉，及び生への注意という三項関係を考えれば，ベルクソンが持続の結合，連続性に執着して，その構造を顧りみなかった，と批判することはできない。この点でジャンケレヴィッチが指摘するように，『物質と記憶』は過去と未来との間にひろげられた一覧表の代りに，過ぎ去った過去と物質的現在との対話を用いている，と言えるのではないか[16]。しかし，生への注意による現在と過去の区別を示しただけでは十分ではない。問題は，現在と過去，すなわち，身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉の関係にある。ところで，「現在の中に過去を再びとらえる具体的行為は再認である」(MM, 96)。それゆえ，再認こそ現在と過去の関係が具体的に示されるものといえる。

第五節　再認——現在と過去の結合——

ベルクソンは，現在と過去との関係を，知覚と記憶との関係である再認によって示そうとする。しかし，知覚と記憶という二要素だけでは，従来の再認論と同様に再認を説明できない，と彼は考える。なぜなら，精神盲の場合，記憶が保持されているのに再認できないという現象があるからである。ベルクソンは〈記憶〉を身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉という二つに区別したが，再認を説明するために再認も二つに区別する。すなわち，自動的再認と注意的再認である。そこでまず自動的再認からみてみよう。

自動的再認は瞬間における再認ともいわれるが，この再認は明白な記憶がなくても，身体だけで可能な再認である。例えばはじめての街路を歩くとき，私は歩くのに途惑うだろうが，その後通い慣れると私ははっきりした知覚がなくても自由に動き回ることができるだろう。はじめて街路を歩く場合と通い慣れた場合との違いは，身体を適切な反作用に向かわせる規則正しい運動随伴があるか否かということ，結局，新しい習慣が形成されているか否かということにある。そして，ここにみられる運動組織についての意識が，はっきりした知覚がないにもかかわらず，再認の感情を抱かせる原因となっている（MM, 101)。この再認は運動によって行なわれるので，過去の記憶と関わらない。しかし，この再認を成り立たせている運動組織の形成において，過去の記憶が潜在的に介入していると考えられる。この意味で，独立した〈記憶〉が運動組織の形成の基底として役立っている。ただ，ここで注意しなければならないのは，ベルクソンの身体に対する考え方であろう。彼の考え方に従えば，神経系は運動の伝導体であるが，運動装置を構成する役割がある（MM, 102)。したがって，同じ運動の反復は身体の習慣を生みだすことになる。ここに身体の能動的な役割が認められる。この自動的再認において重要なのは，この再認が考えられる前に身体によって演じられるということだろう（MM, 103)。この身体は，主体ということができなくても，機械ではない。私たちは自動的再認のうち

に心身の結合した状態をみることができる。しかし，問われているのは，本性上異なる現在と過去，知覚と記憶がいかにして結びつくのか，ということである。私たちはこの問題を注意的再認においてみなければならない。

注意的再認は，形像記憶の介入によって成り立つものである（MM, 107)。ベルクソンは注意的再認を二つの段階に区別する（MM, 119)。第一段階は自動的な感覚＝運動過程であり，第二段階は形像記憶の能動的な，そしていわば偏心的な excentrique な投射である。

まず第一段階の例として，未知の外国語を理解するに到る例を考えればいいだろう。その外国語を理解するのに必要なのは，聴き取られた文章を区切り，その主要な部分を印づけることのできる内的随伴の自動的運動である。この運動は最初は混雑したものであるがしだいにはっきりしたものになり，最後には話し手の運動の大まかな線において再発見する単純化した図を描くようになる。ここに生じつつある筋肉感覚の形で運動図式 schème moteur がみられる（MM, 121)。この図式は完全なものである必要はない。困難な運動を実行するためには暗黙の了解は許されないが，理解するためには特に目立つ輪郭だけでいい。この意味で運動図式と言葉の関係は，スケッチと完成した絵との関係にある（MM, 123)。ここで，この運動図式がいかに生じるかを見るならば，それは聴覚印象と発声器官との間にみられる運動傾向に根拠がある。つまり，聴取された言葉には，目立った特徴だけが反復される傾向がある。これは模倣の運動で，この運動によって図式が生じる。この点で運動図式は，複雑な音の類似を図式化する活動的な〈記憶〉，つまり，身体の〈記憶〉によって得られる。このようにして得られた運動図式は，記憶に対する最初の呼びかけ appel であり，最終的に記憶の形を決定する空の容器 récipient vide (MM, 135) の役割を果たす。この意味で運動図式は，ジャンケレヴィッチが言うように[17]，精神的なものと物理的なものとが出会う場所であり，イマージュと運動の媒介者，あるいは両者に共通な環境なのである。しかしながら，これで再認が成立するのではない。これはあくまでも注意的再認の第一段階であり，意志的注意の前奏曲というべきものである。

注意的再認の第二段階は，記憶の投射であるが，記憶の投射は，この再認において主要な役割を担うものである。ベルクソンは記憶の投射を次のように説明する。まず話の聴き手は一気に d'emblée 対応する諸観念の中に身を置く。そして，この諸観念を聴覚的表象へと展開し，運動図式にはまりながら知覚される生の音をおおう。それゆえ，観念が言語的イマージュを得るに到るのは継起的諸段階を経てなのだが，その過程は，知覚から観念へという求心的なものではなく，観念から知覚へという遠心的なものである。なぜなら，言葉の音声は多様であるし，言語の意味は文全体によって決まるからである。それゆえ，ベルクソンは，観念，すなわち，純粋記憶から出発して，知覚へ向かう遠心的過程を強調するのである。そして，記憶の投射によって知覚と記憶とが融合することに，注意的再認の成立をみることができる。

このように注意的再認をベルクソンの説明に沿ってみてきたが，私たちはここにいくつかの問題を見出す。まず，再認のために一気に過去や観念へ身を置くということはどういうことなのか。次に，記憶の投射がなされるとして，その記憶の選択はどのように行なわれるのか，という問題である。

はじめに，過去から現在への流れにある心的生において，一気に過去へ身を置かなければならないといわれることは，知覚と記憶との本性の差異を示すものといえる。実際，想像することと思い出すことは異なる (MM, 150)。現在の中にいくら過去を見出そうとしても過去を見出すことはできない。このことは逆に同じ対象の中に，新しさ，豊かさを見出すのは，〈記憶〉，すなわち，精神の働きにほかならないということを意味するだろう[18]。また，記憶が現実化されるということは，新しい知覚になるということだが，この知覚の中に過去をみることができるのは，一気に過去へ身を置くということによるといえる。しかし，過去へ身を置くということは実際に過去へ逆行するのではない。それは，未来に働きかけるためには必ずこれと等しく対応する過去が必要であるように (MM, 67)，未来へ働きかける可能性の模索であるといえる。

それではどのように過去へ身を置くのか。このことは記憶の選択の問題と関わるが，でたらめなものではないだろう。実際，過去へ身を置く場合，〈記憶〉は対象と対称的な位置になければならないし（MM, 128），話を聴いている人は対応する観念に身を移さねばならない（MM, 129)。こうした過去への移行は，現在の呼びかけに応じるものといえる[19]。そして，この呼びかけは，運動図式のことを示している。ではどうしてベルクソンは，観念や過去から出発するという遠心的過程を強調するのだろうか（MM, 145f)。その理由として運動図式はあくまでも素描にすぎないし，この図式はほとんど無意識のうちにあるということが挙げられるだろう[20]。したがって，運動図式が図式として機能するのは，記憶の投射によるといえる。それゆえ，運動図式は注意的再認の方向を決める重要な役割[21]を果たしているとしても，記憶の投射の方がより積極的な役割をもつのである。

しかし，記憶の投射にみられるその記憶の選択はどのようになされるのか。それは或る意味で〈記憶〉自身によってなされる。「私たちの〈記憶〉は，さまざまの類似するイマージュを選択し，新しい知覚の方向へそれらを投げ入れる」（MM, 112)。もちろん，ここでの選択に運動図式が関わっていると考えられるが，それは間接的なものにすぎない。この〈記憶〉自身の選択は，〈記憶〉が対象を理解するために自らを拡張 expan-

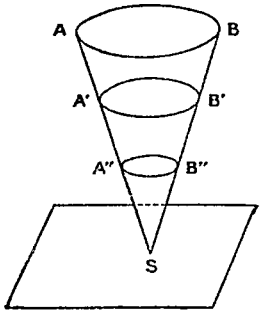

図1

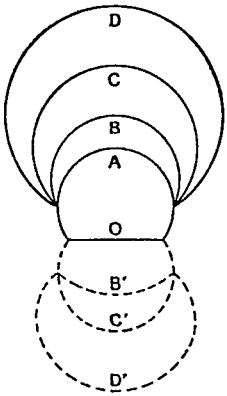

図2

sion すること，すなわち，総合の試み essai de synthèse (MM, 112) を行なうことにある。こうした総合の試みが可能なのは〈記憶〉の柔軟性 élasticité によるのであり (MM, 115)，この結果，〈記憶〉に意識の諸平面，諸水準 niveaux が考えられることになる。この意識の諸平面，諸水準は，有名な円錐の例ならば (図1, MM, 181)，AB, A′B′,……で，回路の例ならば (図2, MM, 115)，OA, OB,……で示される。過去へ身を置くということは，〈記憶〉を拡張して意識の諸平面を生み出すことにある。意識の諸平面は，過去そのものというよりも現実の諸可能性を意味するが，それぞれの平面によってその内実は異なる。文章を理解するために，観念，すなわち，その意味から出発しなければならないとすれば，その意味はこれら諸平面において見出されるといえる。それゆえ，この意識の諸平面は，『知的努力』にみられる動的図式 schéma dynamique[22] を示唆するように思われる。なぜなら，動的図式は，諸平面と同様，イメージへと展開されるものを，相互に含意するという状態で含んでいるからである (ES, 164)。このような〈記憶〉の内の諸平面を位置づけることにまず，記憶の選択の重要な役割がある。そして，この位置づけは現在から過去へ一気に身を置くという仕方にあり，求心的な方向の運動といえる。しかし，この運動によって位置づけられる平面は潜在的なものである。この平面をいかに現実化するか，この記憶の全体からいかに選択するか，が問われなければならない。

ベルクソンは記憶の選択を，類似と近接によって説明する。しかし，彼の説明は，連想説の観念連合とは違う。連想説では独立した心理的アトムを想定し，それらの連合 association によって説明しようとするが，無数の独立したアトムがいかに結びつくのかを説明できない。ベルクソンは逆に記憶の全体から出発し，その分離 dissociation によって説明する[23]。こうした説明をベルクソンがするのは次のことに基づく。すなわち，私たちは，類似する個体に先立って類似を，部分に先立って全体を知覚しているということである (MM, 183)。この結果，それぞれの意識の諸平面に類似の連合があり，その平面の優勢な記憶 souvenirs dominants によって

近接の連合が行なわれる。したがって，全体の〈記憶〉は，現在の呼びかけに答えて次の二つの運動を行なう。一つは移動の運動であり，これによって〈記憶〉全体は経験に向かい，こうして行動を目指して，分かたれることなく収縮する。もう一つは自己回転の運動であり，これによって〈記憶〉は現在の状況に向かい，最も有益な側面をその状況に示す（MM, 188)。つまり，記憶の選択，現実化は〈記憶〉の二重の運動によって行なわれるが，結局それは，意識の諸平面から行動の平面へという遠心的運動過程にある。

こうして注意的再認全体を通してみると，身体の〈記憶〉の呼びかけによって〈記憶〉の諸平面へ向かう求心的運動と，その諸平面から身体の〈記憶〉へ戻るという〈記憶〉自身の往復運動のうちにこの再認は成り立っているといえる[24]。そこで独立した〈記憶〉と身体の〈記憶〉の関係をみると，独立した〈記憶〉は身体の〈記憶〉に対して有益な記憶を示すという点で，その基底として役立っている。反対に身体の〈記憶〉は「無力な記憶に対して身体をとらえ，物質化する手段，要するに現在となる手段を与える」(MM, 169)。したがって，両者は相補的な関係にあるといえる。しかし，ここに或る種の循環があるのではないだろうか。潜在的に現前する独立した〈記憶〉が現実化するためには身体の〈記憶〉が必要であるが，逆に身体の〈記憶〉による呼びかけが，すなわち，単なる記号が意味をもつに到るのは独立した〈記憶〉のおかげである[25]。こうした関係は『創造的進化』における本能と知性との関係にもみることができる。すなわち，知性は探す chercher ことができるが見出す trouver ことができない。逆に，本能は見出すことができるが探すことができない（EC, 152)。この場合，直観が見出すことと同時に探すことのできる唯一のものである。それでは，身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉との間にみられる循環を断ち切る直観があるのだろうか。ジャンケレヴィッチがパスカルの言葉になぞらえて「見出すために探さなければならないとしたら，探すことができるためにはすでに見出していなければならない」と言うように[26]，両者の間にすでに見出されたものがなければならない。それをベルクソンの回路の図（図２）の

OAの部分にみることができるように思われる[27]。円の最も狭いOAは，直接的知覚（純粋知覚）とそれに引き続く同一のイマージュからなり，直接的知覚とその同一のイマージュは密接に結びついて判明な知覚が成立する基盤をなしている。この考えに対して次のような批判があるだろう。すなわち，知覚の成立を説明しなければならないのに，すでにOAに知覚をみているとすれば，それは論点先取の虚偽を犯している，と。しかし，OAは判明な知覚ではなく，いわば漠然とした知覚であり，肝腎なのは，この漠然とした知覚を〈記憶〉の運動によって判明な知覚にすることである。また，この漠然とした知覚が直接的知覚とそれに続くイマージュとからなる不可分なものであるとしても，直接的知覚に同一のイマージュが引き続くとすれば，ここに〈記憶〉の運動が既に関わっているとみることができる。したがって，この〈記憶〉の運動は漠然とした知覚と判明な知覚を貫く根源的なものであり，この運動こそが身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉との循環を断ち切るものといえる。このように考えるならば，私たちは論点先取だとする批判を免れるだろう。

ここに私たちは，身体の〈記憶〉と独立した〈記憶〉とを貫く根源的な〈記憶〉の運動を見出した。この運動は現在から過去へ，そして，過去の現実化によって新しい現在（未来）を生み出す。これはベルクソンの批判するいわゆる弁証法ではなく，メルロ＝ポンティの時間の弁証法ともいうべきものだろう。ベルクソンの注意的再認，つまり，心身関係の説明をみるならば，ロビネが指摘するように[28]，意識の諸水準の理論と運動図式の理論が，精神と身体の二元論を消去しているともいえよう。実際，これらの理論は，心身関係において重要な役割を果たしている。しかしながら意識の諸水準や運動図式は〈記憶〉の運動に基づいているものであり，これらはいわば〈記憶〉の運動の停止点というべきものだろう。とすれば，私たちは過去と現在の結びつきの根拠を〈記憶〉の運動に求めるべきである。〈記憶〉の運動による過去と現在の結合は，〈記憶〉が未来を目指して過去と現在を総合する（MM, 248）存在だからといえよう[29]。

こうして私たちは，〈記憶〉の運動を見出すことによって，注意的再認

のうちに最初区別された過去と現在の結びつき，つまり，事実上の心身結合をひとまず見ることができたように思われる。もちろん，このことによって心身問題が解決されたとは到底いえない。ベルクソンの説明は様々な問題を孕んでいる。こうした問題についてここで論じることはもはやできない。しかし，本稿において私たちは，ベルクソンが心身関係を時間の関係としてとらえ，それを〈記憶〉の運動によって説明したということを，少なくともみることができた。そして，ここに，心身問題に対するベルクソンの発見があったといえるだろう。

註

ベルクソンの著作からの引用・参照は，『著作集』(*Œuvres*, P.U.F., 1959) における各著作のページ付を用い，次の略号とページ数を並記することによって示す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*
MM: *Matière et mémoire*
EC: *L'évolution créatrice*
ES: *L'énergie spirituelle*
PM: *La pensée et le mouvant*
Œ: *Œuvres*
M: *Mélanges*

(1) デカルトの Je pense, donc je suis になぞらえて，ベルクソンにおいて Je dure, donc je suis と言うことができるが，問題は Durée の内実にあることは論を俟たない。H. Gouhier,《Maine de Biran et Bergson》in *Les études bergsoniennes,* vol. 1, P.U.F., 1948, p. 161。J. Hyppolite,《Aspects divers de la mémoire chez Bergson》in *Figures de la pensée philosophique.* I, P.U.F., 1971, pp. 468f 参照。

(2) 『物質と記憶』初版の序文 (Œ, 1491)。「『然り』と『否』は哲学において不毛である。興味深く，示唆的で，豊かなのは，『どの程度か』ということである。物質と精神のような二つの概念が互いに外的であると認めても，何も得るところはない。反対に，二つの概念が触れ合う点に，共通の境界に身を置いて，接触の形式と本性を研究するならば，重要な発見をするだろう」(M, 477)。

(3) ベルクソンは mémoire と souvenir を区別して用いているように思われる。すなわち，mémoire には作用としての側面が，souvenir には内容としての側面がみられる。例えば，mémoire が対象に向けて souvenirs を投射すると言われ

る (MM, 128)。したがって，本稿では，mémoire には〈記憶〉，souvenir には単に記憶という訳語を当てる。

(4) J.-P. Sartre, *L'imagination*, P.U.F., 1936, pp. 40–71.（平井訳，『想像力』，人文書院，四七—七七頁）参照。

(5) 『物質と記憶』の第二章は出版に先立って，「哲学誌」*Revue philosophique* に掲載されているが，両者の間には多少異文がみられる。例えば「哲学誌」にはイマージュとされていたのに，『物質と記憶』では本文に挙げた語に書き換えられている。このことは，イマージュは書き換えられた語の意味を含んでいたことを示唆するだろう。尚，この点についての文献的研究として，A. Robinet,《Le passage à la conception biologique》in *Les études philosophiques*, 1960, N° 3, pp. 375–388 参照。

(6) 「多様な持続というこの仮説を物質的宇宙に広げる根拠はその当時（『創造的進化』当時）認められなかったし，今日でもわからない」（括弧内は筆者，M, 100)。尚，物質と持続については，DI, 157, 171 参照。

(7) 中島盛夫，「現象学とベルクソン」，『講座・現象学 I』，弘文堂，pp. 192–195 参照。

(8) 「私たちは物質的世界を知覚し，この知覚は是非はともかく，私たちの内と同時に外にあるように思われる」(M, 98)。

(9) 「私たちは，記憶の形成は知覚の形成のあとでは決してなく，両者は同時である，と主張する。知覚が生じるにつれてその記憶は物体の側の影のように知覚の側に現われる」(ES, 130)。

(10) この点についてベルクソンの分析に立ち入ることはできないが，MM, 108, 118f, 134, 196, 参照。

(11) 「ベルクソンは脳が記憶を含まないということを示したが，記憶が身体なしに意味をもつということを示しているわけではない」M. Merleau-Ponty, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, Vrin, 1978, p. 89.（滝浦，他訳，『心身の合一』，朝日出版社，一三二頁)。

(12) Ibid., p. 99, 邦訳，一四八頁，参照。

(13) 「……記憶はそれ自体で保存される」(PM, 80)。

(14) J.-P. Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943, pp. 179–181.（松浪訳，『存在と無』I，人文書院，三三六—三四〇頁)。

M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. 481.（竹内，他訳，『知覚の現象学』2，みすず書房，三二一頁）参照。

(15) J. Hyppolite, op. cit., p. 470 参照。

(16) V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, P.U.F., 1975, p. 120（阿部・桑田訳，『アンリ・ベルクソン』，新評論，一六二頁)。

(17) Ibid., pp. 116f, 邦訳, 一五八頁。

(18) 「新しいものが産出されるのは, 対象の中にではなく, 対象を凝視する精神のうちにおいてである」(G. Deleuze, 《La conception de la différence chez Bergson》 in *Les études bergsoniennes*, vol. 4, P.U.F., 1956, p. 103)。

(19) 「記憶が応じる呼びかけが出発するのは, まさしく現在からである」(MM, 170)。

(20) 「この素描された運動, あるいは, 単に準備された運動に私たちはたいてい気づかない。なぜなら, 私たちはそれを知ることに関心がないからである」(ES, 45)。

(21) この点を見誤ると, 次のような批判がなされることになる。「記憶の投射はすでになされた, より深い再認を隠す悪しき隠喩にすぎない」(M. Merleau-Ponty, op. cit., p. 28, 邦訳1, 五五頁)。

(22) 運動図式と動的図式の関係は微妙な関係にある。なぜなら, 動的図式が運動図式に対応するのか, 動的図式が運動図式を用いるのか, はっきりしないからである。その上, ベルクソンの円錐とピラミッドの比喩にとらわれると両者を混同することになるだろう (MM. 169, ES. 160)。しかし, ドゥルーズが指摘するように, 運動図式は純粋に感覚＝運動的で, 動的図式は心理的・記憶的なもの, と区別されなければならない (G. Deleuze, *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966, p. 64 註, 宇波訳, 『ベルクソンの哲学』, 法政大学出版局, 七七頁)。尚, 両者の関係を示すものとして, 次の討論におけるユッソン Husson の発言も注目に価する。「純粋記憶は, 動的図式を介して現実化されるときはじめて形像記憶になる。動的図式は, 運動に外在化されうる運動図式を演じさせながら, 自らを展開する」(*Bulletin de la société française de philosophie, Numérro special 1959: Bergson et nous & Discussions*, Armand Colin, 1959, p. 60)。

(23) 「ベルクソンは不確定なものを説明するために確定されたものから出発するのではなく, 反対に不確定なものから出発し, 分離によって確定されたものへ達する」(G. Mourélos, *Bergson et les niveaux de réalité*, P.U.F., 1964, p. 109)。

(24) 「……知性作用は遠心的であると同時に求心的である」(V. Jankélévitch, ibid., p. 232, 邦訳, 三一七頁)。

(25) この関係は動的図式と運動図式の関係についてもいえる。「動的図式は運動図式を必要とするが, 運動図式は, 自らのために運動図式を創って構成した動的図式がなければ何ものでもない」(G. Madinier, *Conscience et mouvement*, Béatrice-Nauwelaerts, 1967, p. 391)。

(26) V. Jankélévitch, ibid., p. 233, 邦訳, 三一八頁。

(27) この部分のアノマリーの指摘については, G. Deleuze, *L'image-temps*, Les Éditions de Minuit, 1985, p. 65 註, pp. 92f を参照。

(28) A. Robinet, *Bergson et les métamorphoses de la durée*, Seghers, 1965, p. 75。

(29) 「要するに〈記憶〉は存在を時間化する。なぜなら，感覚＝運動的現在でもって〈記憶〉は過去の実在を生みだすのだから。〈記憶〉は，持続を私の持続とするために持続を集め，総合する働きである」(J. Delhomme, *Vie et conscience de la vie*, P.U.F., 1954, p. 31)。

（博士課程学生）